REMINISCENCES

思い出すままに

日本癌病態治療研究会 特別会員

辻　公美

生い立ちから東海大学まで

近江の国（滋賀県蒲生郡）日野町上野田、十二代医家辻秀伯（秀伯は襲名）の長男として昭和７年（1932）に誕生した。昭和20年（1945）旧制八日市中学に入学、その年の８月15日に終戦を迎えた。戦後の教育改革で学制が変わり、現県立日野高等学校（旧高等女学校）へ昭和23年編入学となった。その当時、医学部に直接受験出来ず教養課程を２年送ることが義務づけられていて、日大世田谷医学進学コースを経て東京医大に入学、昭和32年（1957）東京医大を卒業した。特に医学に興味があったわけでなく、面白くない授業中大きな声で雑談して立たされたこともあった。部活ではバスケットボールに熱中し、医科・医歯薬科、関東大学３部リーグなどで連続優勝し、バスケットをしながら医学の勉強をしたことだった。

卒業インターンを終え、医師国家試験（その頃は面接試験もあった）に合格後、父が内科医（大阪大学第２内科出身）であったこともあり、反骨の精神もあって外科医になろうと篠井金吾教授の門下生として母校東京医大・外科教室（早田義博前教授、加藤治文現教授）に入局した。臨床外科医として麻酔科、一般外科、肺外科を研修した（1958～1969）。

その後、ペンシルヴァニア大学病理学（故 Prof. WE Ehrich）及び医学部卒後コースを修了、デューク大学外科学（Prof. WW Shingleton）・免疫学（故 Prof. DB Amos）の研究生として移植・腫瘍免疫、HLA を学んだ。1965年篠井教授が訪米時デューク大学を訪問された。その折篠井論文（1932年版）を手渡され、早速英訳しエーマス教授にみせたところ、直ちに Sir Peter Medawar を紹介していただき、この訳文を送った。お二人とも大いに驚かれた。メダワー教授は、同種移植は免疫反応をおこすことを、兎の皮膚移植実験で発見し（1944～45）、ノーベル医学生理学賞を受賞した。PM の発表より10年も前に、allograft の 2nd set 現象を発見されていたことになる。誠に残念なことに日本語での研究発表であったため世界の目にふれなかったのである。

東京医大から慶應義塾大学医学部へ移り、大越正秋・中村宏教授等の同種腎移植時に、日本で初めて HLA typing を導入した。その後兵庫県立西宮腎移植センターを経て、1974年東海大学医学部設立時より就任し、移植学と HLA 学の研究・臨床応用に努力し、日本及びアジアでの発展に力をそそいだ。

生越喬二教授と

その当時東海大学消化器外科には、三富利夫教授のもと幕内博康先生、生越喬二先生達がおられた。胃癌患者の免疫遺伝学的解析のため HLA 検査を行うため血液サンプルを採集してもらった。ある時（十数年前か）生越先生が小生の部屋に来て、胃癌患者の免疫遺伝学研究を、胃癌患者の宿主要因を診断・治療・予後などについて総合的にきめこまかく長期フォローをしてみようとの提案だった。その後、当日本癌病態治療研究会で研究班が結成され、非常に興味ある成果をあげ、現

在もなお長期拡大解析が行われていると聞いている。

癌遺伝子の方からの研究は飛躍的進歩をとげたが、癌の宿主要因の研究解析はいまだしの感がある。最近、生活習慣病の宿主因子の解析が名古屋大を中心に始まったとの新聞報道を読んだが、その成果が大いに期待される。生越先生の先見性と実行力に敬意を表するとともに、なお今後一層の発展をのぞんでいる。

蛇足ながら現役時代、肺癌患者の宿主要因解析のためHLA検査を行い、興味ある結果をすでに発表している。喫煙と肺癌との密接な関係は、すでに世界規模で行われた調査の結果、能動・受動喫煙の影響は大きな社会問題となっている。しかし長期間のヘビースモーカーでも肺癌にならないし、またnon-smokerでも肺癌になることがあり、それらの宿主因子を裏から解析しようというものであった。因みに小生は生まれながらのnon-smokerである。

①

②

③

①第40回アメリカ胸部外科学会（マイアミビーチ、1960）左から遠藤（東医）、井口（九大）、庄司（東大）、河村（京府大）、辻、岩（北大）、篠井（東医）、黄（九大）先生方／②山男　篠井金吾教授の勇姿、マッターホルンで（1960年夏）／③第5回日本移植学会1969年（山村雄一会長）でDB Amos特別講演　左後から岡村（阪大）、辻、山村（阪大）、北川（阪大）、村上（阪大）、前列左から花岡（京大）、DB Amos

退職後

1．再生医療の昨今

1998（平成10）年3月東海大学を退官、すべての研究勉強会から退こうと思っていたが。私の人生哲学の一つとして、正式退官後はすべての役職から退き、若手にゆずることをモットーにしている。しかし世の中ままならず。

十年間続いた細胞療法研究会が発展的解消して2002（平成14）年日本再生医療学会が発足した。今までの行き掛かりから理事長をおおせつかってしまった。本年2005年3月第4回日本再生医療学会（松田暉会長）総会が大阪で開催され成功裡に終了した。翌年第5回は岡山（岡大 田中会長）、第6回は横浜（東工大 赤池会長）が予定されている。2007年には、より一層の活力ある学会に飛躍するため選挙制による役員改選が行われ、Science baseの学問的発展と社会貢献をめざしている。

世の中では不治の病は再生医療で何でもかんでも、なおってしまうという風潮があり大きな期待がよせられている。しかし、まだまだ乗り越えなければならない多くの課題があり、諸兄姉の御叱正、御助言を願っている。

II．ナノプラチナとの出会いから

医薬界以外の方々との人間関係から、退官後にナノプラチナに遭遇しその虜になった。まだこの“モノ”自体の活性、機能など不明な点が多いが鋭意検討中である。モノは最終的に原子からなり、さらに原子核と電子からなり、これらをいじくるサイエンスを量子力学というらしい。従来の医薬品開発の試行過程から脱皮し、今までには考えも及ばなかった量子の世界（マクロ、ミクロからナノへ）を理解・駆使しなければならないようである。生体内電子分布測定は可能か、医学系にも導入されることになろう興味ある領域ではある。

旅に活きる

最後に少し話題をかえ、退職後家内と二人の旅の模様を紹介してみよう。現役時代は学会が主で副としてその前後に少し旅をしたが、今は学会出席とは名ばかりで、旅そのものが主となっている。

バルト三国（エストニア、ラトヴィア、リトアニア）

2004年秋、３都市すべて世界遺産の指定を受けているバルト三国のタリン、リーガ、ヴィリニュスを訪れた。ヴィリニュスから北西へ車で約２時間弱のリトアニア第２の都市カウナスを訪れた。第２次世界大戦初期ナチスの迫害から逃れるため、日本経由に活路を求めた多くの（数千人）ユダヤ人に、人道主義からビザ発行にふみきり、多くの命を救った杉原千畝記念館があった（写真４）。

バルト三国の帰路、ロシア・サンクトペテルブルクを訪れた。三十数年前東京医大時代、篠井教授のお供をした時、十数年前東海大学時代、日本人のルーツをさぐりに（HLA 検査）訪ソした時を懐かしみながら昨今の大きな社会の変化を目にした（写真５）。

イースタン・オリエンタル・エキスプレス
―シンガポールからバンコック３日の旅―

世界の豪華列車として有名なオリエント急行に一度は乗ってみようと思っていたところ、アジア内でも同様に再現された列車の旅を満喫出来ることがわかり乗車した。

宣伝通り優雅な木作りの客室、行き届いたサービス、超一流の贅沢な美味しい食事、車窓から眺める異国の世界を満喫した。第１日目11：00発シ

④

⑤

⑥

④カウナスの旧日本領事館、杉原千畝領事の机で／⑤旧レニングラードのエルミタージュ前で、辻夫妻（2004.9）／⑥イースタン・オリエンタル・エキスプレス、カンチャナブリ駅にて（2005.1）

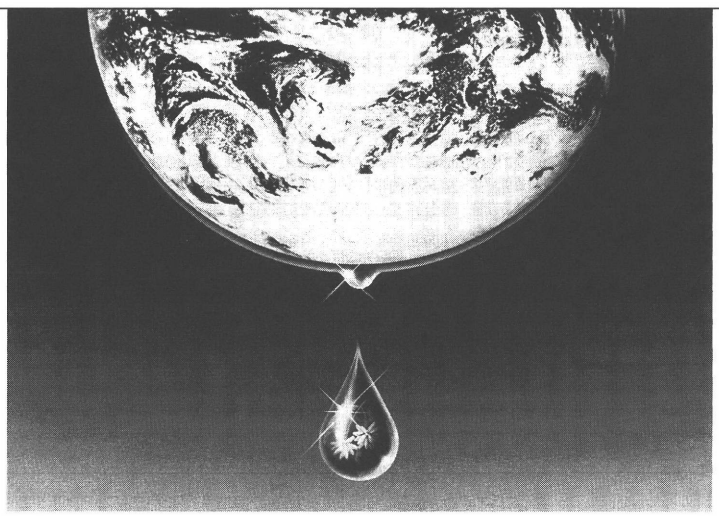
ンガポールから北上マレーシアのクアラルンプール、第2日目午前ペナン島、第3日目9：00クワイ河を訪れ、同日最終日正午カンチャナブリを通り、14：45バンコックに到着した（写真6）。

次は時間的、経済的余裕と相談してヨーロッパへのOEで優雅な旅をしてみたいと思っている。

最後に、特に正確な記録を調べたわけでなく、思いつくまま記したので、少し年代錯誤があるかも知れない。今までの多くの先生方、諸先輩にお世話になった。思い出すままに、お出会いした順にお名前を記し、感謝の気持ちを表し、故人にはご冥福を祈ります。

故篠井金吾、早田義博、故WE Ehrich、故WW Shingleton、故DB Amos、故山下久雄、故山村雄一、故陣内傳之助、故北川正保、園田孝夫、佐々木正五先生方。

Topotecin®



★効能・効果、用法・用量、警告、禁忌および使用上の注意等につきましては、製品添付文書をご参照ください。

抗悪性腫瘍剤

劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品※　薬価基準収載

トポテシン®注

Topotecin® Injection（一般名：塩酸イリノテカン）

※注意—医師等の処方せんにより使用すること

製造販売元　いのち、ふくらませう。第一製薬株式会社
資料請求先
〒103-8234 東京都中央区日本橋三丁目14番10号
ホームページアドレス
http://www.daiichipharm.co.jp/

提携先　株式会社 ヤクルト本社